

a journal



NAGOYAKINEMA
NEU

ナゴヤキネマ・
ノイ

8 2024
月号

〒464-0850

名古屋市中種区今池 1-6-13
今池スタービル 2F

Tel.052-734-7467

<https://nk-neu.com>

8月の定休日
火曜日

8/6・13
20・27

毎月発行

RESERVATION

■各作品の10日前から上映1時間前までは公式サイトからプリペイドで席のご予約ができます。

■現金でのご購入、特別鑑賞券、ご招待券をご使用の方は、10日前から当日までの窓口受付をご利用ください。

PLATFORM



公式サイト



公式 Facebook



公式 X
@nkn_2024



公式 Instagram
@nkn_2024

上映スケジュール表は2面をご覧ください

ACCESS



ナゴヤキネマ・ノイ

- ▶地下鉄今池駅⑨・⑩番出口より徒歩3分
- ▶今池スタービル2F(契約駐車場なし)

7.27(土)～8.9(金)

『ユニコーン・ウォーズ』

監督: アルベルト・バスケス
(2022年 92分)



7.27(土)～8.16(金)

『ちわんやのはなし
- 四百年の旅人 -』

監督: 松倉大夏 (2023年 117分)



8.3(土)～16(金)

『VIVA SAURA!
カルロス・サウラ』《2作品》

- ①壁は語る (2022年 75分)
- ②情熱の王国 (2021年 95分)



8.3(土)～16(金)

『RICHLAND リッチランド』

監督: アイリーン・ルスディック (2023年 93分)



8.3(土)～9(金)

シャンタル・アケルマン映画祭 2024

《7作品/入替》※①～③初公開。

- ①向こう側から (2002年 102分)
- ②南 (1999年 70分)
- ③ホテル・モンタレー (1972年 63分)
- ④私、あなた、彼、彼女 (1974年 86分)
- ⑤ジャンヌ・ディエルマンブリュッセル 1080、
コメルス河畔通り 23 番地 (1975年 200分)
- ⑥アンナの出会い (1978年 127分)
- ⑦因われの女 (2000年 117分)



8.10(土)～16(金)

『シークレット・ディフェンス』

監督: ジャック・リヴェット (1998年 173分)



8.10(土)～16(金)

井口奈己監督作品《2本立》

- 『左手に気をつけろ』(2023年 43分)
- 『だれかが歌ってる』(2019年 30分)



8.17(土)～『Mommy マミー』

監督: 二村真弘 (2024年 119分)
●8/17(土) 舞台挨拶: 二村真弘さん ※9/3(火)～6(金)は休映。



8.17(土)～23(金) 越後奥三面
山に生かされた日々』

監督: 姫田忠義ほか (2023年 145分)



8.17(土)～30(金)

『プロミスト・ランド』

監督: 飯島将史 (2024年 89分)
●舞台挨拶: 飯島将史さん(予定)



8.17(土)～23(金)

『メニイ・クラシック・モーメンツ』

監督: ゲイリー・ケイボ 音楽: カラバナ (1976年 78分)



8.24(土)～9.2(月)

『カメラを持った男たち - 関東大震災を撮る -』

監督: 井上実 (2023年 81分)



8.24(土)～9.2(月) 『福田村事件』

監督: 森達也 (2023年 137分)



8.24(土)～30(金)

『ラウダー・ザン・ユー・シンク』

監督: ジェド・I・ローゼンバーグ 出演: ペイヴメント (2023年 90分)



8.31(土)～9.13(金) 『THE DEVIL QUEEN デビルクイーン』

監督: アントニオ・カルロス・ダ・フォントウラ
※9/3(火)～6(金)は休映。 (1973年 100分)



8 月上映スケジュール表

8/6・13・20・27(火)は休館です。

※9/3(火)～6(金)は機材調整のため、休館いたします。

8/3(土)～9(金)

	8/3(土)	4(日)	5(月)	7(水)	8(木)	9(金)
11:00	『ちやわんやのはなし - 四百年の旅人 -』					
13:15	カルロス・サウラ『壁は語る』					
14:45	『RICHLAND(リッチランド)』					
16:40	『ユニコーン・ウォーズ』					
18:30	ホテル・モンタレー	19:50 南	向こう側から	アンナの出会い	ジャンヌ・ディエルマン	囚われの女
						私、あなた、彼、彼女

8/10(土)～16(金)

	8/10(土)	11(日)	12(月)	14(水)	15(木)	16(金)
11:00	『ちやわんやのはなし - 四百年の旅人 -』					
13:15	カルロス・サウラ『情熱の王国』					
15:10	『シークレット・ディフェンス』					
18:20	『左手に気をつける』『だれかが歌ってる』(2本立)					
19:45	『RICHLAND(リッチランド)』					

8/17(土)～23(金)

	8/17(土)	18(日)	19(月)	21(水)	22(木)	23(金)
11:00	『Mommy マミー』					
13:25	『越後奥三面(おくみおもて) - 山に生かされた日々』					
16:10	『プロミスト・ランド』					
18:00	『メニイ・クラシック・モーメンツ』					
19:30	『Mommy マミー』					

8/24(土)～30(金)

	8/24(土)	25(日)	26(月)	28(水)	29(木)	30(金)
11:00	『カメラを持った男たち - 関東大震災を撮る -』					
12:40	『福田村事件』					
15:20	『プロミスト・ランド』					
17:10	『Mommy マミー』					
19:30	『ラウダー・ザン・ユー・シンク』					

8/31(土)～9/2(月) ※9/3(火)～6(金)は休館。

	8/31(土)	9/1(日)	2(月)	4(水)	5(木)	6(金)
11:00	『カメラを持った男たち - 関東大震災を撮る -』			休館 ※9/6(金)まで。		
12:40	『福田村事件』					
15:15	『Mommy マミー』					
17:30	『デビルクイーン』					
19:30	『Mommy マミー』					

ご入場料金・入替制

一般 1800 円 大学生・会員 1400 円 高校生以下 1000 円 シニア(60 歳以上)1300 円
障がい者・会員(シニア・学生)1100 円 ペア割(2 名)2800 円
●『左手に気をつける』&『だれかが歌ってる』一般・大学生 1400 円 その他 1000 円
○会員サービスディ:木曜日 会員・障がい者 1000 円・会員 1 名とのペア(2 名)2000 円
○ファーストディ 一般 1200 円 会員・障がい者 1000 円

会員募集

お申込日から 1 年有効で 2000 円。
会員特典は当日ご料金の割引きのみにになります。
受付は劇場窓口にてお願いいたします。

『ユニコーン・ウォーズ』

ファンタジックな幻獣ユニコーンとぬいぐるみのティディ・ベア。彼らに有限の生命を与え、森の覇権をめぐる血肉をむさぼり合う究極の戦争と軍隊・宗教そして家族を描ききった大作。スペインの鬼才アニメーション作家アルベルト・バスケスは本作でゴヤ賞最優秀長編アニメーション映画賞を受賞。(92 分)

『ちやわんやのはなし - 四百年の旅人 -』

朝鮮半島にルーツを持つ陶工たちの苦闘と研鑽を描くドキュメンタリー作品。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、多くの西日本の大名が朝鮮人陶工を日本に連れ帰った。中でも島津家の庇護のもと、後に沈壽官家の初代となる沈当吉は、薩摩焼の礎を築き、以来十五代、重厚かつ精緻な作風は世界に知られる。上野焼や萩焼などのルーツにも触れつつ、日本と韓国の陶芸文化の交流の歴史を浮かび上がらせる。語り＝小林薫(117 分)

VIVA SAURA! / カルロス・サウラ 2 作品

フランコ政権下のスペインで反体制を貫き『血の婚礼』『カラスの飼育』など数々の傑作が日本でも知られている巨匠カルロス・サウラ(1932～2023)最後の未公開 2 作品。先史時代から現代へ、壁をキャンパスにアートを探索する『壁は語る』(75 分)。ミュージカルの舞台に心血注ぐ人々の物語を、撮影監督にヴィットリオ・ストラローロを招き、光と影その躍動を描いた『情熱の王国』(99 分)。

『RICHLAND』

映画『オッペンハイマー』の公開で、アメリカの原爆開発に、あらためて注目が集まる中、「マンハッタン計画」の中核を担う開発と実験の現場、核燃料生成拠点であるハンフォード・サイトとベッドタウンとなった人工都市リッチランドの現在に至る数奇な歴史を追ったのが、このドキュメンタリー。アメリカの正義を信奉する街の風潮が感じとれる一方で、多様な出自の人々の多様な主張が混在する様子もまた収められ、議論のきっかけになる一篇。(93 分)

シャンタル・アケルマン映画祭 2024
 7 作品 / 入替

映画史上の重要作品である『ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル 1080、コメルス河畔通り 23 番地』(200 分)『アンナの出会い』(127 分)などの傑作と共に異国の地、米国で手掛けた初上映のドキュメンタリー『ホテル・モンタレー』(63 分)『南』(70 分)『向こう側から』(102 分)によってアケルマンの足跡をたどる。

『シークレット・ディフェンス』

2016 年に世を去ってから、より注目が高まっているジャック・リヴェット監督の忘れられていた長編作品、日本では劇場初公開。父を殺された姉弟の復讐劇が思わぬ事態へと展開していくサスペンス映画で、バリの街そのものを迷宮に仕立てる鮮やかな手際は、リヴェットらしいマジック。彼の作品では『ジャンヌ 愛と自由の天使』『ジャンヌ 薔薇の十字架』にも主演したサンドリーヌ・ボネールがヒロインを、強くクールに演じる。(173 分)

『左手に氣をつける』

『人のセックスを笑うな』『ニシノユキヒコの恋と冒険』の井口奈己監督最新作は、左利きを媒介するウイルスが蔓延する 20XX 年、子ども警察による厳しい取り締まりが行われる世界での、予想外の行動が笑いを誘い、暴走する様子を描く現代の『トマトケチャップ皇帝』。エグゼクティブ・プロデューサーは金井久美子、金井美恵子。併映は、街角で聴こえるメロディが、日常の中で人の想いを伝えていく短編作品『だれかが歌ってる』(30 分)

『Mommy マミー』

1998 年 7 月、夏祭りで提供されたカレーに猛毒のヒ素が混入。67 人が中毒を発症し 4 人が死亡。いわゆる、和歌山カレー事件、である。犯人と目された林真須美は、容疑否認のまま、2009 年に最高裁で死刑が確定するが、今も無実を訴えている。本作は、時に度を越すような熱意をもつ二村昌弘監督の、捜査や報道関係者だけでなく、家族にも向かう入念な取材による異色のドキュメンタリー。事件の経緯を見つめ直し、目撃証言や科学鑑定の虚を突く。(119 分)

『越後奥三面 山に生かされた日々』

ダム建設によって湖底に沈むことになった新潟のある山村を 1980 年から 4 年に渡って撮影した貴重な記録。熊やウサギを狩り、山菜をとり、川ではサケやマスの漁、焼畑農業を営む。気の遠くなるほど古くから営まれてきた暮らしの姿が、昭和の終わり頃には、まだ、残されていた。記録映画作家・映像民俗学者として知られる姫田忠義ひきいる民族文化映像研究所(民映研)の傑作が、デジタルリマスターで、今、蘇る！(145 分)

『プロミスト・ランド』

春を待つ東北地方の村。代々の伝統的狩猟を継承するマタギに、その年の熊狩りの禁止が告げられた…。閉鎖的な村で鬱々と現代を生きる青年たち(杉田雷麟・寛一郎)と村人(小林薫ほか)の繊細な心情と同時に狩る者たちの厳かな時間を追い見る者を大自然へ誘う。阪本順治監督組に多数参加し本作がデビューとなる飯島将史監督の傑作。原作：飯嶋和一。(89 分)

『メニイ・クラシック・モーメンツ』

1970 年代後半に日本でも紹介され、カラパナの不滅の名曲と共に大きな話題を呼んだフアン映画の劇場初公開。カリフォルニア、ハワイ、オーストラリア、南アのロコサーファーたちが自然との共生から作り上げた素朴で美しい時間をとらえた撮影技術にも驚かされる、聖なるドキュメンタリー映画だ。(78 分)

『カメラを持った男たち 関東大震災を撮る』

101 年前の 9 月 1 日に起きた大災害、関東大震災。その被災直後にカメラを担いで街に出た映画人たちがいた。残された映像記録を元に、彼らの足取りを追うことで、震災自体の被害の様子もまた、詳細に見えてくる。『母の手仕事 一日の暮らしの記録』の井上実監督は、カメラマンの芦澤明子らの専門的なコメントを随所に挟み、映像記録の倫理性や歴史的意義にも踏み込む。2023 年キネマ旬報文化映画の部ベスト・テン第 1 位。名古屋初上映。(81 分)

『福田村事件』

昨年、大きな話題となった森達也監督初めての劇映画。関東大震災後の混乱の中で、流言蜚語が飛び交い、疑心暗鬼が自警団を中心に集団が暴走させ、多くの朝鮮人が犠牲となった。本作は四国からの行

next arts 通信

神戸智行 一千年を描くー

天命ともいえる縁を紡いで、任を担える稀有なる芸術家。岐阜市出身(1975 年生まれ)の日本画家・神戸智行さんは、まさに選ばれし存在だと思う。そう得心できる展覧として、神戸さんの里帰り展とも言うべき特別展が、岐阜県美術館で開催されている(9 月 8 日まで)。

企画と主催に太宰府天満宮の名があるように、今回の個展は「菅原道真公 1125 年 太宰府天満宮式年大祭記念」と銘打たれている。神戸さんは 2027 年の式年大祭に向けて、文書館のための 24 面の襖絵制作を担ったのだ。そのために、10 年前には家族で太宰府に居を移し、日々描くことに誠心誠意向き合ってきた。

木々や水面のゆらめきに、生きとし生けるものへの澄んだ眼差しが宿っている。「千年を描く」という重圧もあったであろうが、神戸さんの真摯な態度は、画面に凜とした清涼感を湛えている。また、2008 年のボストン研修時に出会い、以来親交を深めてきた太宰府天満宮司の西高辻信宏さんとの信頼関係と互いへの尊敬の念は、共通の世界観と祈りの心性が交差するからなのか、展覧会初日のクロストークでもよく伝わってきた。

今回の展覧は、襖に仕立てられて奉納される前の原画のお披露目として、貴重な機会である。特に 8 面の水面に映る緑の樟と鯉の影の画面は素晴らしいと、広間全体に展開する構想があるそうだ。「あと 32 面を……描きます!」という神戸さんの言葉に、さるなる期待が膨らんだ。

【トト】

ナニやってんだか！(3)

6 月 2 6 日に中部電力の株主総会があり、いくつかの株主提案をしました。そのうちの一つです。原発で重大事故が起きて緊急事態となったら、被ばくを避けるため、半径 5 km 圏内の住民はすぐに避難、3.0 km 圏内は屋内退避となっています。これが現在の原子力防災対策指針、自治体の原子力防災計画で決められています。電力会社もこの計画に協力することになっています。

ところが、能登半島地震では、通信の断絶、家屋の倒壊、道路の寸断が実際に起きてしまい、住民の避難はできこなかったのです。

だから、中部電力の浜岡原発は将来起きるとされる南海トラフ巨大地震の想定震源域にあり、東海道新幹線や東名高速道路にも近く、長期にわたって日本が真っ二つに分断される危険性があります。避難しなければならない住民は約 8 0 万人ですが、東名高速や国道などを使って自家用車やバスなどで逃げることになっているので、そんなのはできっこないし、屋内退避もできっこない。だから、浜岡原発の再稼働はもうあきらめてくださいという内容でした。

これに対して取締役会の意見は緊急時対応の充実強化に取り組んでいるので大丈夫と言って反対です。だけど、避難計画自体が破綻しているのに、いくら充実強化しても、ムダでしょ！

住民の安全が守れない避難計画のままだでは、原発の運転をしてはいけません。

(しょう)

商の一团が、方言の行き違いから、千葉県 の農村で虐殺された事件を元にしていて。これまでに多くの研究者が集めた史実の蓄積をもとに、加害者となった側の人々の日常を含めて、その狂気に至る過程を描こうとした意図をしっかりと確かめた。 (137 分)

『ラウダー・ザン・ユー・シンク』

ニルヴァーナやソニックユースと共に 90 年代を代表するインディー / オルタナ・シーンを牽引した現役バンド、ペイヴメント。ゆるく粗削りなローファイサウンドは、メンバーたちよりはるか年上でヒッピーの「おやじ」ことギャリー・ヤング抜きには生まれなかった…。温度差で時代を駆け抜けたバンドの傑作ドキュメンタリー映画！(90 分)

『THE DEVIL QUEEN/ デビルクイーン』

リオの裏社会を牛耳るトランス系女王の下で娼婦、麻薬売買、キアなどブラジルで最も疎外された闇の中の人々を描き”ラテンアメリカのファスビンダー”と称される国際映画祭にも出品された未公開傑作。絢爛とした美術や、ヒット曲オンパレードの強烈なサウンド、人物描写が醸し出す複雑な魅力がさく裂。(100 分)

パッと、みて、ポン！

筆者が演劇活動を具体的に始めたのは、1983 年初頭で、その年の 7 月に七ツ寺共同スタジオで初舞台を踏んだ。なぜ始めたのかというと、大学に入ってから知人に「デント芝居があるから観に行かない？」と誘われたことがきっかけで興味を持ったからだ。舞台公演は中日劇場や御園座でしか観たことがなかったの、その時の衝撃は大きい。開演前に居酒屋へ入って「え？酒を飲むの？」と思ったが「そういうものだ」と言われ、ほろ酔いで観た。内容はほぼ忘れているが、LP レコードを目の前でグルグル回しながら、盤面に掘られた溝を読み解いて歌い始めるというシーンを今も覚えている。終演後に「打ち上げがあるから参加しよう」と言われ、その場でも飲み始める。なんだか不思議な世界だった。それからというもの、数々の公演を観に行くことになるわけだが、特に七ツ寺共同スタジオで行われる公演の中には、毎夜その場で打ち上げと称する飲み会が開かれ、そこで多くの知人を作っていくことになる。最近は、そんな「多人数巻き込み型」の打ち上げもめったに少なくなり寂しい限り。数ある公演の中でも少年王者館(当時は少年王者)では多くの出会いがあった。冒頭の初舞台を踏む際の稽古場を見つけたことができたのも彼らのおかげだ。北青年の家。今の名古屋市青少年交流プラザ(ユースクエア)の場所にあった施設だ。使用料は無料で、使用権利は早い者勝ち。いろんな集団が集まって面白い場所だった。気がつけば 40 年以上、この世界と関わっている。少年王者館主宰、天野天街さん、楽しい時間をありがとうございました。私はもう少しこの世を遊びます。 (P)

ウニタ書店情報 (052-731-1380)

世界の覇権をめぐるアメリカと中国の競争・対立は、激しくなるばかりであるが、その狭間で揺れる台湾は微妙な政治的スタンスを強いられている。民進党政権が独立を封印し、現状維持を主張しているのが、その象徴だ。一方で、メディアの中には「台湾有事」を声高に叫び危機感を煽る向きもあるが、極めて無責任と言わざるをえない。そこからは台湾に暮らす人々の姿や思いは見えてこない。

5 月に刊行された「台湾デモクラシー」(渡辺将人・著、中公新書)は、今やアジアの民主主義の優等生と言われるまでになった実態を、特異なメディア環境・過熱する選挙キャンペーン・多様性を重んじる文化などの視点から、明らかにしている。そこから伝わってくる市民たちの熱量は日本とは比べようもなく高い。

また、今日に至る台湾戦後史を人物を中心にして描いているのが、昨年 11 月に刊行された「台湾のアイデンティティ」(家永真幸・著、文春新書)である。日本の植民地支配から解放後、共産党との内戦に敗れ雪崩込んできた国民党による弾圧と支配が続いたが、粘り強い抵抗を続けた結果、総統の直接選挙そして政権交代までを実現させてきた過程を詳細につづっている。

冷静な議論をするためにも、台湾の過去と現在を知ることは極めて重要だと思う。

いなかのじけん

墓じまい

「そろそろ墓じまいも考えなくちゃならぬのだけど。」寺の世話役をやった私は、U 治さんに相談された。盆施餓鬼の集集に檀家廻りをしていた折のことであった。「わかりました、それとなくおつさまに言っときます。」U 治さんはエアコン設置などの電気仕事を請け負う一人親方で、お盆も忙ししく働いている。彼は実家に一人暮らしだ。以前は親父さんも一緒に住んでいた。ある日、親父さんが、知人の家にエアコンを据え付けてくれないか、と U 治さんに頼んだ。工事が終わって発覚した。そこは親父さんともフィリピン娘の愛の巣だったのだ。「親父さんに帰ってくん。」激怒した U 治さんは、その場で親子の縁を切った。「籍は絶対いれんなよ。」それで墓じまいだ。

彼のように、跡継ぎのない檀家さんは、ご近所だけで四軒、町内ではもう、推して知るべし、考えたくない。だいたいお寺だってそうだ。「坊主にはならない」宣言を住職の跡取り息子がした。それで先祖から続く現住職は、膝も痛む引退を考え、余所の寺から新任住職を迎えられるように、お寺の庫裏を改修、それを檀家からのお布施でまかなう。一軒当たり 15 万円也。ぎゃっ。でもなかなか決まらない。何でもお寺というものは、宗派ごとにピラミッド型の上下関係を築いていて、ウチの BD 院は上から十何番目の階層で、下っ端。新任住職はその階層の上の方から迎え入れなければいけない決まりだという。今時そんな奇特な人などいないやない。廃寺まっしぐら。

